

呉錦堂を語る会通信

NO.17 Jan. 2015

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2015.1.15



孫穗芳(そんすいほう)女史寄贈 孫文銅像 除幕式 挙行される 2014年11月8日(土) (於)孫文記念館

昨年11月8日、孫文記念館で「孫文記念館開館30周年記念の集い」の行事として、孫文令孫、孫穗芳女史寄贈の孫文銅像の除幕式が挙行されました。式典は孫穗芳女史、移情閣主人呉錦堂令孫、呉伯瑄氏、公益財団法人孫中山記念会齋藤富雄理事長、孫文記念館愛新翼館長ほかの参列のもと、盛大、厳粛に執り行われました。この日の行事は、午後、中華会館に会場を移し、山口一郎記念賞授賞式、孫穗芳女史講演など、記念式典が行なわれました。(報告・文責 編集委員 橘雄三)



孫文生誕120周年記念式典から30年

—参加者の顔ぶれに時の流れを—

今、わたしの手許に、孫中山記念館1987年発行『孫中山先生生誕120周年記念行事の記録』という本があります。記念式典は、1986年11月1日、兵庫県公館で盛大に挙行されました。この式典の来賓名簿を見ると、まず、孫穗芳女史の名があり、宮崎露荃、小坂主和子と並び、呉家を代表した呉伯瑄の名もあります。また、写真を見ると、須田勇、林同春、陳徳仁、孫文、二人の曾孫 王祖耀氏と宮川祥子氏、山口一郎、王柏林各氏の顔が見えます。



孫文、二人の曾孫 王祖耀氏と宮川祥子氏

今回の孫文銅像除幕式の参列者と見比べたとき、主賓は同じく孫穗芳女史ですが、ほかの顔ぶれに大きな変化を感じます。生誕120周年の頃に活躍されていた方々の多くが既に鬼籍に入られ、呉家も呉伯瑄氏が呉錦堂の事績を継承しておられます。そしてまた、孫文



右から呉伯瑄氏ご夫妻、孫穗芳女史、齋藤富雄理事長、愛新翼館長

の曾孫お二人、王祖耀氏と宮川祥子氏が親しく談笑されている様子を目にしました。歳月の流れに感慨深いものがあります。



貝原俊民理事長の思い出

元(財)孫中山記念会職員 橘 雄三

昨年11月13日、孫中山記念会の貝原俊民元理事長がお亡くなりになった。11月8日、孫文記念館開館30周年記念祝賀会でお会いした直後のできごとで、信じられなかった。

ちょうど10年前、貝原理事長の時代、私は財団職員として勤務した。財団の理事会、関係団体の新年会等、節目々々で、灘浜の震災記念協会や、ポーアイの神戸女子大学に貝原理事長を訪ね、行事内容について説明し、質問にお答えし、ご指摘を承って帰った。近寄りがたい存在であったが、話すところ、こやかに、話題はその日の用件以外にも及んだ。

あるとき、中国の友人の書いた小説で、私が編集・出版した『天にむかって歌う』という本を贈呈したことがあった。あとで、よくもあのようなあつかましいことをしたものだと思われ、冷や汗が出た。ところが、しばらくして理事長から、「読んでみると大変おもしろい本でした」と丁寧な手紙が届いたのには、恐縮し、感激した。

一年という短い期間ではあったが、一コマ、一コマが深く私の心に残っている。

ご冥福をお祈りいたします。

聞き取り、小東野(こそくの)開拓百年史 (4)

呉錦堂の現・神戸市西区神出町小東野の開拓についての論文といえば、①川辺賢武「呉錦堂と神出小東野開拓」（『歴史と神戸』第1巻第2号 神戸史学会 1962年）と、②浦長瀬隆「呉錦堂の開墾と地主制」（『神戸の歴史』第11号 新修神戸市史編集室 1985年）を先ずあげることができます。それから、論文ではありませんが、③『わたしたちの郷土神出』（神戸市立神出小学校編 1964年）にも、呉錦堂の小東野開拓についての記述があります。また、上述論文、著書とはちがったジャンルで、④『めこうむかし』『神出むかし物語』などを上梓されている藤井昭三氏の著作類があります。これらの作品において、村の古老や親族からの聞き取り、及び著者の実体験がどのように記述されているかを見ていきます。

《論文、著書 ①②③④ それぞれの特徴》

①については、川辺氏ご自身、論文中、「昭和32年、小東野に建碑の計画をしたとき、その碑文を記すための参考として、神出農業協同組合の専務理事福島秀雄氏が、苦心して集められた資料がわたしの手許にあるので、それをもとにその後の調査を加えて、ここに記録して福島氏の努力に酬ゆることにした」と記されています。これら資料と村の古老からの聞き取りが氏の論文の基礎になっています。

②については、これも、浦長瀬氏が、論文中、「幸いにも、このたび新修神戸市史編集室で調査した『神出村役場文書』の中に『小東野村耕地整理施行地区設計書』や『小東野村耕地整理事業及収支決算報告書』など呉錦堂の小東野開墾に関する資料が多数発見され、開墾の実態を解明することが可能となった」と記載されているとおり、これら資料を駆使した22ページに及ぶ論文で、聞き取り・伝聞の類は一切ありません。

③は、そのほとんどが①からの引用です。

④については、藤井氏ご自身、〔著者紹介〕に、「神出町に生まれ、育ち、暮らす」と記されているとおり、自らの体験や父親からの伝聞、あるいは親族から得た写真等をもとに著されたものです。

従って、この、『呉錦堂を語る会通信No. 17』「聞き取り、小東野開拓百年史(4)」では、上述①と④を、この順序で取りあげます。

《川辺賢武「呉錦堂と神出小東野開拓」からの引用》

(引用1 この頁の写真2葉は川辺論文掲載のものではない)

呉錦堂は開拓事業を遂行するために本国から中国人を数名呼び寄せて開拓に従事させていた。古老のことばによると多いときには20名ほどいたようで、そのうち一人は日本人の一人とともに監督にあたり、ほかは労働者に過ぎなかった。彼らは松の木を伐採するかたわらその材でセメント樽の加工をしていた(当時呉錦堂は尼崎にセメント工場をもっていた)。そのための製材所が二カ所つくられていた。出来上がったものは馬力で運び出していた。



神戸市西区神出町、藤井昭三氏所蔵

製材所風景(1910年撮影) 左から4人目、和服で座っている人物が日本人監督? 中央、洋服で座っている人物が中国人監督? 大きな柱の右寄りに丸鋸が見える

その一方では土地の開拓、農道、水路の建設、溜池の築造などに従事していた。これらの従業員は付近にバラックの家を数軒建ててもらって住んでいた。一般には“支那人部落”といわれていた。この縦、横の農道は10尺もある広いもので、当時の人々は無駄なことをするもんだとあきれていたが、のちになってはそれが非常に役立って、小型トラックの通行は自由なため、農機具や収穫物の運搬が便利で、よその村の倍も仕事はかどると、錦堂の先見の明をたたえている。

(引用2 文中、福島氏とは、上述、福島秀雄氏のこと)

呉錦堂は小東野開拓の重要な水源として、山田川疎水からの水を引き入れる二つの池、宮ヶ谷池と小東野池を築造しました(この3行は編集委員補記)。

この二つの池は十分に手間をかけて堅固にできているので、それ以来一度も損壊したことがない。この築造費は記録がないのでわからないが、今なら宮ヶ谷池は二億円、小東野池は一億円はかかると福島氏はいっている。



築造中の宮ヶ谷池(1908年)

聞き取り、小束野開拓百年史（4 続き）

前頁はすべて、川辺賢武「呉錦堂と神出小束野開拓」からの引用です。但し、写真2葉（1枚は藤井昭三氏所蔵、もう一枚は神戸市文書館所蔵）は、どちらも川辺論文に掲載されていたものではありません。編集委員が、掲載位置として適切と判断し挿入しました。小束野開拓の関連写真として非常に貴重なものです。この頁の藤井昭三氏の著作からの引用については、そのほとんどについて、私自身、藤井氏に何度もお会いする中で、氏から直接、お聞きした話でもあります。（2、3頁共に 編集委員 橋雄三）

《呉錦堂の小束野開拓略述－編集委員》

呉錦堂は、明治41年（1908年）、明石郡神出村小束野に133町歩余の土地を購入しました。当時、小束野は、現在の国道175号沿いに2、3の農家があっただけで、ほかは雌岡山（めっこさん）のふもとまで松樹の山林でした。呉錦堂は購入した133町歩のうち、水田として約100町歩の開墾を計画し、65町歩を開田した段階で、大正15年1月、病死します。



当小束野開拓事業は、書面上は一貫して長男啓藩名義でなされてきましたし、呉錦堂が死んでも、啓藩が引き継いで事業を発展させていけばよかったわけですが、錦堂が死んだ3年後の昭和4年、啓藩は、財界不況、並びに小作農業者の人心悪化を理由に、兵庫県へ開墾打ち切りの申請を行っています。この時点での累計移住戸数は37戸でした。呉錦堂の壮大な開拓事業は、実質的には、彼の死をもって終止符を打つこととなりました。

《藤井昭三氏、水谷たけ子両氏の著作から》

藤井昭三氏の著作から一つ、財団法人日本土壌協会発行『圃場と土壌』2001年6号に掲載の「神出、小束野と呉錦堂」から3箇所と、これをもとにした、水谷たけ子氏の漫画「呉錦堂さんの小束野開発」から2箇所を抜粋引用させていただきました。

（引用1 支那人村の人たちについての伝聞）

明治生まれの父から伝え聞いた話では、旧正月（春節）ともなれば、それぞれ長い髪の毛を編んで腰辺りまで垂らし、手に手に紅い提灯をさげて、精一杯やつして、

♪ トーフ トーセ トンガラコ
アカマチャ トテクチャ トーン

と歌をうたいながら、地元の村へ繰り出して来たとのことである。



（引用2 呉錦堂屋敷についての伝聞）

地元の村人たちも折りにふれ、呉錦堂屋敷に立ち寄った。夜道に提灯の灯が消えて、マッチを借りにいったら別の提灯を出してくれたり、野菜をあげたらミカンを沢山くれた、という話も残っている。地元からも、幾人かが働きに出ていたので、子供たちも、よく遊びに行ったという。瓦やレンガを手で割って、空手の芸を披露したり、手品を見せて呉れたりしたという。

（引用3 藤井氏ご自身の記憶）

少年時代、よく呉錦堂屋敷へ遊びにいった。入り口の前坂を上がると、でんと大きな井筒があり、傍らに大きな桑の木があった。桑は夏、甘い実をつけた。そこから白壁の建物が続く。玄関をまたぐと、天井の高いがらんとした広い空間があり、夏でも冷んやりとした土間がつづいていた。どんな人が住んでいるのか、わからなかったが、表札は呉ではなく、すでに日本人の名前であった。



呉錦堂屋敷跡に建つ兵庫楽農生活センター“かんでかんで”左端の八角屋根は移情閣を模したという

大人物小故事 (12)

我的外公吴锦堂 曹愛徳著

今回は「乐善好施」を載せました。お楽しみください。なお、日本語訳は編集委員が担当いたしました。不適切な訳については、ご指摘ください。(編集委員 橘雄三)

乐善好施

我外公身为旅日华侨巨富，但他的日常生活依然保持着劳动人民的美德，自身俭朴，对他人乐善好施。

当年家乡连遭水灾，我外公曾几次捐银3万多两，捐款38000余元救灾。一次故乡三北沿海海啸像猛虎，粮棉无收，百姓生命垂危，我外公闻信后就心急如焚，很快就委托上海三北轮船公司的老板虞洽卿在扬州等地购大米，又捐银3万余两并运回500余万斤。

当时外公委托虞洽卿用轮船载着大米运回慈北，船到宁波港之后，再用航船沿姚江经余姚等地到鸣鹤，观海卫一带。米船沿路经过的地方，百姓和民工都睁大了眼睛，看着一船船的白米源源不断地向慈北而去，大家纷纷议论：要是能留一点给我们该多好啊！正巧其中有一个民工在慈北东山头有一房亲戚，大家就商量请他去找这位亲戚，那民工在大伙强烈的要求下，就厚着脸皮，抱着试试看的想法，就苦苦地去请求亲戚的帮忙，给我外公寄了信。啊！没等几天，我外公就回信啦！表示答应他们的要求。那些民工都呆掉了，心想是真的吗？接着我外公就想法托慈北赈济局拨了三百袋大米送到横河，石堰。民工们真是喜出望外，见到了白米，犹如雪中送炭，激动得说不出话来，心想天底下真有这样的大好人。后来人们都称外公不愧是一位“慈善家！”

外公做善事是接二连三的，可谓是做了一辈子的好事，后来政府赠送他“乐善好施”的匾一幅。



進んで善行を積む

私の祖父は在日華僑として、莫大な財を成しましたが、日常生活は依然として、労働者の美德を持ち続け、自身、つましく、人に対しては喜んで慈善事業や義捐をしていました。

当時、故郷は続けて水害に見舞われましたが、祖父はかつて、銀3万余両、3万8千余元など、何度か救済の献金をしたことがあります。一度は、故郷の三北沿岸が猛虎のような津波に見舞われ、穀物や棉花が収穫できず、人々の生命が危機にさらされたときです。祖父は消息を耳にし、居ても立っても居られず、すぐさま、上海三北汽船会社の経営者虞洽卿に委託して、揚州などの地で米を買い付け、銀3万余両を寄付し、そして、5百余万斤を運搬しました。

その時、祖父は虞洽卿に委託して、汽船に米を積んで慈北へ運送し、船が寧波港に着いたら、定期航行船に積み替え、姚江沿いに、余姚等を経て、鳴鶴、観海衛一带に廻送しました。米を積んだ船の沿道では、人々はみんな目を見張り、米を積んだ船が続々と慈北に向かっていくのを見て、「もし、少し、自分たちのところに残してもらえればどんなにいいか！」と喧々諤々、騒がしいことでした。うまいことに、その中に一人、慈北東山頭に親戚が居る人がいて、みんなは相談して、その人に、この親戚を訪ねて行くことを頼みました。その人は、みんなの強い要求を聞いて、厚かましく、やってみようという考えを胸に持って東山頭の親戚のところへ行き、私のお祖父さんに手紙を書いてほしいと、しきりに頼みました。あっ！日をおかず、なんと、私の祖父は、彼らの要求を承知したとの返事を書きました！人々はみんなぼかんとし、本当？と心の中でつぶやきました。続いて、祖父は、全体の中から三百袋の米を横河と石堰に送り届けることを慈北罹災者救済局に頼みました。人々は大喜びし、米を見て、まるで「雪の中に炭を送る」の例えと感激で言葉も出ず、世の中にはこのような大篤志家もいるのだと心の中でつぶやきました。さすが、のちの人々がみんな祖父を“慈善家！”というだけのことはあります。

祖父が行った慈善は、次から次へと続き、一生涯の善行というべきで、のちに※政府はお祖父さんに、“楽善好施”という一面の扁額を贈りました。

[※政府] 補注：1900年、徳宗光緒帝より賜る。(『寧波文史資料第二輯』「愛国華僑呉錦堂」1984年)